広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	親鸞使用の声点加点形式について ： 坂東本『教行信証』声点の位置づけ
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	訓点語と訓点資料 , 129 : 1 - 18
Issue Date	2012-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00033664
Right	Copyright (c) 2012 Author
Relation	

親鸞使用の声点加点形式について　―坂東本『教行信証』声点の位置づけ―

佐々木　勇

〇、本稿の目的

本稿の目的は、次の二点である。

1．親鸞が使用した声点の形式を整理し、文章形式・訓読法との関係を明らかにすること。

2．他の親鸞遺文と比較して多様な、坂東本『教行信証』の声点加点形式を、親鸞加点資料中に位置づけること。

一、親鸞自筆の声点図

親鸞は、次の文献に、声点図を残している[1]。

西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』（巻首）鎌倉時代初期写本。

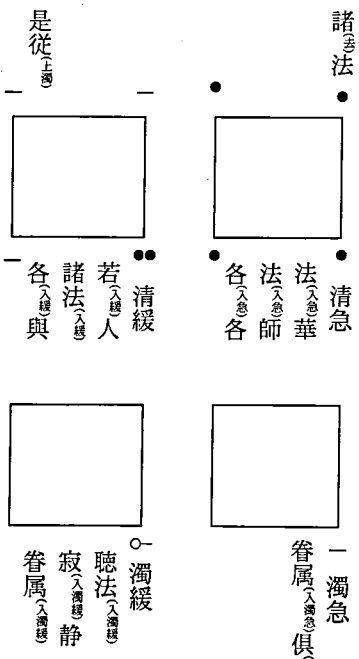
西本願寺蔵『唯信抄』（巻頭）寛喜二年（一二三〇）写本。

専修寺蔵『浄土高僧和讃』（巻頭）親鸞自筆朱点か。

下は、西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』巻頭の点図を、推読を交えて記したものである。各壷に、声点を加点し、入声点の名称、および、語例が記されている。入声点には、「● 清急」「一 濁急」「●● 清緩」「〇̄ 濁緩」の四種が有る。ただし、西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』巻頭の点図は、破損のため、読解できない部分が存する。

しかし、幸い、文保元年・二年（一三一七・八）と正平六年（一三五一）の二回、存覺によって書写された本にもこの点図が写されており、それによって、元は左の通りであったことが知られる[2]。

豊後國大義供奉聲
八幡大菩薩納受之聲也



二、親鸞加点の声点

ところが、右三文献の本文に加点された声点は、声点図の声点とは異なる。

西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』は、点図と同じく、「●

清急」「一 濁急」「●● 清緩」で加点している。しかし、「濁緩」は、点図「○̄」ではなく、「●̄」を使用している。

また、西本願寺蔵『唯信抄』・専修寺蔵国宝本『三帖和讃』本文には、「●」と「一」との二種の声点しかない。いわゆる清濁を区別するのみである。[3]

三、親鸞遺文における声点形式

そこで、親鸞加点資料を、声点の形式に着目して分類してみる。

ただし、坂東本『教行信証』の声点は複雑であるため、後に単独にとりあげることとする。

1．入声に急・緩を区別する声点形式

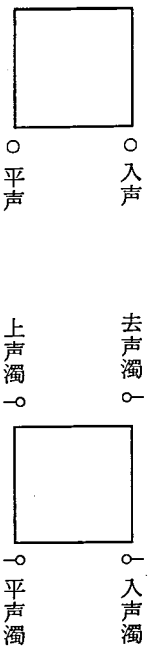
この形式では、入声以外の清音は「●」、濁音は「一」で示す。この声点形式で実際に加点されている親鸞遺文は、『観経・阿弥陀経集註』の本文のみである。

a西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』経文(第七巻)

((第七巻)は、『増補 親鸞聖人真蹟集成』における所収巻。以下同じ。)

2．入声に急・緩を区別しない声点形式A

―清「○」・濁「○̄」―



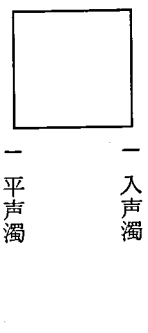
この形式の声点が加点されているのは、次の親鸞自筆本である。

b西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』註文(第七巻)、c浄土論註朱点(第七巻)、d浄土論註付曇鸞伝(第七巻)、e大般涅槃経要文・業報差別経文(第九巻)、f信微上人御釈(第九巻)、g烏龍山師並屠児寶蔵傳(第九巻)、h聖覚法印表白文[法専寺蔵本](第九巻)、i晨旦國十四代(第九巻)、j西方指南抄(第五・六巻)

右の本文は、漢文または漢語中心であり、それを訓読した文献である。[4] なお、b西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』註文は、aの行間・上下欄・紙背の経論・釋等註文に、訓読のための訓点を加点したものである。[5]

3．入声に急・緩を区別しない声点形式B

―清「●」・濁「一」―



この形式の声点が加点されているのは、次の諸本である。

k三帖和讃(第三巻)、l唯信抄[西本願寺本](第八巻)、m唯信鈔[専修寺蔵信證本](第十巻)、n唯信鈔[東本願寺等蔵残巻](第八巻)、o唯信抄[最乗寺蔵断簡](第九巻)、p尊号真像銘文[建長本](第四巻)、q尊号真像銘文[正嘉本](第四巻)、r皇太子聖徳奉讃断簡(第九巻)、j西方指南抄

ここに属する諸本は、いずれも、全体が漢字片仮名交じり文であるか、漢字片仮名交じり文を含む。[6]

清「●」・濁「ー」の声点は、右の全資料において、朱筆で書き込まれている。

以上、親鸞が加点した声点は、右の三種に分けられる。[7]

坂東本『教行信証』声点の分析によって知られている、入声に急・緩を区別する声点は、現存親鸞自筆本では、a西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』における字音直読の経本文にしか見られない。

この実態から、入声に急・緩を区別する声点加点は、親鸞加点の声点形式の中で、特殊なものであったことが知られる。[8]

四、坂東本『教行信証』の声点

右の状況から、漢文に訓読の訓点が加えられている坂東本『教行信証』には、入声に急・緩を区別せず、清「o」・濁「o̧」とする形式（2.）での声点加点が予想される。

しかし、坂東本『教行信証』には、「o」「o̧」「o̧」「ー」「●」「●」「●」と、多様な声点が加点されている。

1. 坂東本『教行信証』の声点に関する先行研究

小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（「東洋大学大学院紀要」第2集、一九六五年九月）は、坂東本『教行信証』の声点は、入声に急・緩を区別しており、「急」は舌内入声音、「緩」は喉内・唇内入声音に対応することを説いた。ところが、この対応原則には、例外が多く存した。

十年後、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」（「国文学攷」第六十九号、一九七五年十月）で、「入声急」には促音も含まれることが指摘され、例外は減少した。はじめに引用した親鸞自筆声点図でも、「急」の語例として挙げられていたのは、「法〔入急〕華」「法〔入急〕師」「各〔入急〕各」「眷属〔入西急〕俱〔上〕」の促音化例であり、「緩」の語例は「若〔入緩〕人」「諸法〔入緩〕」「各〔入緩〕與」「聴法〔入西緩〕」「寂〔入西緩〕静」「眷属〔入西緩〕」の促音化しない音環境の例であったことからも、「急」の入声点が促音をも標示していたことは明らかである。

しかし、後に示す『観経・阿弥陀経集註』字音直読の入声点と比較すれば、『教行信証』入声点には、対応規則の例外がまだ多く残る。それは、多種の声点が、時を隔てて加点されているためではなかろうか。

小林論文は、坂東本『教行信証』の訓点を、次の四種に分けている。左に、要約する。

第一次点A類―墨筆。本文と同色同筆の仮名。他次の仮名と比較して字形が最も大きく太い。全巻に亘って詳細に加えられており、本資料中訓読文の根幹をなす最も重要な加点である。

第一次点B類―墨筆。A類と同色、同じ筆致と見られるが、A類の仮名に比べてやや小字である。全巻に散在し、主として、本文中の漢字に単字としての音又は訓を示す。

第二次点―朱筆か。第一次点と比較して仮名の字体は略同趣である。各巻に散在し、第一次A類の仮名を上から訂して別語とし、或いは彼を補い、又音訓を新たに加える。

第三次点―墨筆。仮名の大きさは、第一次点B類と同じくやや小字であるか、丸味を帯びる。第一次点よりやや新体をも認める。（これらは鎌倉時代中期の他資料の仮名字体に通ずる）。

右の中、第一次点A類・第一次点B類と第二次点とは筆致に共通するものがあり、同一人の筆と認められる。第三次点はやや異なる印象を受けるが、これは恐らく用筆の相違によるもので、やはり同一人が時を隔てて加えたものと見るべきであろう。

小林論文は、声点についても右の別が存することを、「漢字音」項目の〔断書〕で指摘している。

漢字音の清濁及び四声を示す各種の符号は、墨色から見て第二次点は判明するが、他は、筆勢や大小から第一次A・B、第三次点が存することは知られるが一々についての区別は困難が多いので、一緒に扱った。いずれにしてもその年代的差は、二三十年の違いと考えられる。

2．坂東本『教行信証』声点の分類

小林論文の述べる如く、声点を加点時で分類することは困難である。

しかし、声点の墨色・大小と形から、以下の三種は区別可能である。（本稿の調査・引用は、原本閲覧の機会が得られないため、『顯浄土眞實教行證文類(坂東本)影印本』（二〇〇五年、真宗大谷派宗務所）を使用した。ただし、用例の所在は、便宜的に『親鸞聖人真蹟集成』の頁数・行数（三5.3は、三の五頁三行目）で示す。）

①墨声点・大

（二138.1）

（二35.4）

（二32.1）

（三5.3）

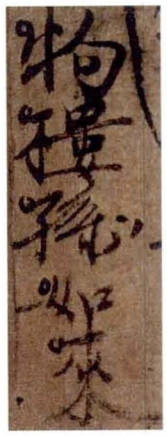
右の如く、大きな墨声点の○は、右下斜線と半円との二画で書かれている。

これは、親鸞真筆の代表とされてきた、左の『浄土論註』巻末「曇鸞伝」朱声点と同じ書き方である。

（『御影堂平成大修復事業記念西本願寺展』に依る）

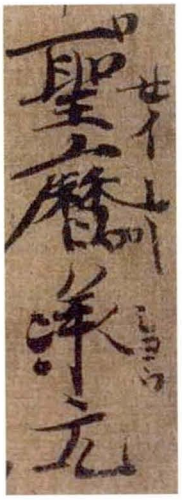
②墨声点・小

坂東本『教行信証』の小さな墨声点○は、①墨声点・大と異なり、半円を二つ書くか一画で円を書く。次の如くである。



（六末 46.7）

（六末 47.1）



（六末 92.1）

〈「聖暦」の声点は大。ただし、「暦」の外側声点は小。〉

③朱声点

朱声点も、書き方は、②墨声点・小と同様である。「●」「ˬ●」も、比較的多く見られる。

〈七字目「鼓」の朱声点は、墨声点・大に重書〉（二 110.4）

（二 48.3）

（二 48.8）

以上の加点実態から、①墨声点・大が先、②墨声点・小、③朱声点が後に加点されたことが知られる。

3．坂東本『教行信証』における三種声点の形式と加点数

①墨声点・大

坂東本『教行信証』墨声点・大は、「○」と「ˬ○」のみであった。本稿巻末に、その全例を掲げる。

「○」―一一〇三例（内、入声字七六例）

「ˬ○」―　一七四例（内、入声字二五例）

「○」が清を示し、「ˬ○」が濁を示すことは、先行研究で検討済みである。「○」・「ˬ○」共に、入声の急・緩を区別せず、平声・上声・去声・入声（舌内・唇内・喉内）のいずれでも用いられる。

この墨声点・大は、先に分類した声点形式2にあたる、親鸞が漢文訓読資料に使用した形式である。

②墨声点・小

墨声点・小には、「○」「ˬ○」「°○」「一」「●」「ˬ●」が存する。数の多い順にその例数を記すと、左の如くである。

「○」―三一三一例（内、入声字　二三六例）

「一」―一〇九〇例（内、入声字　七八例）

「◎」―　三五二例(内、入声字　三三八例)
「○」―　三二七例(内、入声字　一六二例)
「●」―　七六例(内、入声字　一一例)
「●」―　四一例(内、入声字　四例)

「●」「●」は少数であり、分布の片寄りは見られない。小さな円がつぶれてしまったものかもしれない。この点、未詳であるため、墨声点「●」「●」は、以下の検討から除外する。[9]

③朱声点

本資料に加点された朱声点を、加点例数順に並べると、次の通りである。

「●」―五五四例(内、入声字　四〇例)
「ー」―三五一例(内、入声字　一六例)
「○」―二六一例(内、入声字　一八例)
「◎」―　五一例(内、入声字　四八例)
「○」―　五〇例(内、入声字　四二例)
「●」―　四五例(内、入声字　三四例)
「●」―　二八例(内、入声字　二七例)

朱点は、本文・他の訓点と紛れることがないためか、円を書かず、点を打つだけのものが比較的多くを占める。[10]

4．坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点における入声点

次に、坂東本『教行信証』入声点の特徴として指摘されている、入声音・促音との対応関係を見る。

それに先だち、比較のため、入声に急・緩を区別する声点加点が見られた西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』経本文における親鸞加点入声点の実態を見る。[11]

表1　西本願寺蔵『観経・阿弥陀経集註』経本文の入声点

「急(キウ)」の入声点

声点＼下接字頭音	喉k内 濁急ー	喉k内 清急●	唇p内 濁急ー	唇p内 清急●	舌t内 濁急ー	舌t内 清急●
無声	2	53	19	9	13	24
有声	0	1	0	0	9	27
句末	0	1	0	0	8	20

「緩(ユル)」の入声点

声点＼下接字頭音	喉k内 濁緩●ー	喉k内 清緩●●	唇p内 濁緩●ー	唇p内 清緩●●	舌t内 濁緩●ー	舌t内 清緩●●
無声	11	36	6	7	0	5
有声	18	37	11	10	0	6
句末	28	15	9	8	0	0

右の如く、親鸞が「急（キフ）」と呼ぶ入声点は、舌内入声字、および、無声音が続く唇内・喉内入声字に加点される。また、「緩（ユル）」の入声点は、唇内・喉内入声字に加点されるのを原則とする。

「急」入声点の例外は、喉内入声字「逼」への加点例二例である。〔逼〕所逼（入急）云（去）何（上濁）當見（観一三5）　此人苦逼（入急）（観五九6）

「逼」は、保延本『法華經単字』鎌倉期点で「ヒツ」、観智院本『類聚名義抄』「和音」でも「ヒチ」と仮名書きされている。図書寮本『文鏡秘府論』保延点、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点にも「ヒツ」の加点が見られ、当時の日本漢字音では、舌内入声字相当に扱われている。親鸞遺文でも、「逼（ヒチ）〈悩ス〉」（坂東本『教行信証』三115.6）「逼隘（ヒチイチ）」（『浄土論註』上29）と、舌内入声同様チとした例が有る。そのため、本資料でも、舌内入声字に加点される「急」入声点が加点されたもの、と考えられる。

また、「緩」入声点における例外は、舌内入声字に「緩」声点が加点された、左の十一例である。

〔一〕一（入緩）一＜2例＞　一（入緩）寶像　第十一（入緩）觀　一（入緩）日　佛（入急濁）説（入急）無（去）量（平）壽（平濁）觀（平）經一（入緩）卷（平）　〔七〕第七（入緩）觀　經七（入急）七（入緩）日　〔八〕第八（入緩）觀（平）　〔日〕日（入緩）日　日（入緩）没（入急）

「一・七・八・日」は、いずれも古くから日本語中で用いられてきた字音であろう。そのため、字音直読の際も、加点声点の通り、開音節化して発音されることがあったものと考えられる。

この西本願寺蔵『觀經・阿弥陀經集註』経本文と同様に、坂東本『教行信証』②墨声点・小の入声点を整理すると、左表2の如くになる。[1-2]

表2　坂東本『教行信証』墨声点・小の入声点

「急（キフ）」の入声点

声点＼下接字頭音	舌内 t 清急 ○	舌内 t 濁急 ー	唇内 p 清急 ○	唇内 p 濁急 ー	喉内 k 清急 ○	喉内 k 濁急 ー
無声	80	24	22	9	18	5
有声	24	6	1	0	1	0
語末	71	30	2	0	3	1

「緩（ユル）」の入声点

声点＼下接字頭音	舌内 t 清緩 ○○	舌内 t 濁緩 ○ー	唇内 p 清緩 ○○	唇内 p 濁緩 ○ー	喉内 k 清緩 ○○	喉内 k 濁緩 ○ー
無声	1	2	21	7	75	39
有声	8	4	23	9	60	18
語末	6	7	19	13	121	61

右のとおり、坂東本『教行信証』墨声点・小の入声点も、「急」入声点は舌内入声字と、無声音が続く唇内・喉内入声字に、「緩」入声点は唇内・喉内入声字に加点される。入声の急・緩を区別しない①墨声点・大を別にしたことで、先行研究の整理と比較して、対応原則の例外は少なくなった。しかし、なお次の例外が残る。

○語末または有声音が続くにも拘わらず「急」入声点が加点された唇内・喉内入声字(八例)

〔濕〕濕(シフ)(入急)(四10.7)・阿濕(シフ)(入急)婆國(六末26.5)　〔十〕十(入軽急)喩(イウ)(平)(六末60.5)　〔足〕滿(平)足(入急濁)(五51.3)　〔色〕容色(入急)(四8.1)　〔錯〕疑(上濁)錯(入急)(六本27.2)　〔翼〕翼(ヨク)(入急)(六末22.9)　〔赤〕赤(入急)白(入緩濁)銅(去濁)(六本97.1)

○「緩」入声点が加点された舌内入声字(二十八例)(13)

〔一〕一(入緩)(六本50.8)・第一(入緩)(六本73.5)・一(入緩)百(入緩)五(上濁)十(入緩)年(六末79.4)・一(入緩)時(上濁)(四28.5)・一(入緩)日(入緩)(六末59.5)・一(入緩)異(平)(六本17.2六末60.6)　〔日〕日(入緩)(四26.6)・一(入緩)日(入緩)(六末59.5)　〔活〕邪(上濁)活(クワチ)(入軽緩)(六本96.1)　〔實〕實(入緩濁)(四36.6五19.1五23.2)・實(入緩濁)半滿權(六本3.7)　〔別〕別(入軽緩濁)傳(平濁)(六末93.4)　〔佛〕佛(入緩濁)言(上濁)(二179.1)・化(平)佛(入緩濁)菩(上濁)薩(入急)(四26.5)・佛(入緩濁)(五19.1)・佛(入緩濁)土(平濁)(五74.6)・釋迦佛(入緩濁)(六本78.1)・唯(去)佛(入緩濁)(六末84.2)　〔述〕十(入緩)異(平)九(上)述(シユツ)(入緩濁)(六末60.6)・述(スチセム)(入緩濁)(六本90.3)　〔闊〕各闊(クワチ)(左)(入緩)(二29.2)　〔説〕領(平)説(入緩濁)ス(二154.6)　〔決〕決(入緩)定(平濁)(三167.7)　〔殺〕殺(入緩)害(平濁)スル(三176.3)　〔出〕出(入緩)没(入急)(四50.7)

次に、朱声点についても、入声字に加点された入声点と入声音・促音との関係を整理すると、表3となる。これまでと同じ形式の表にするため、「●」「●̣」「●̄」の加点数を( )内に記す。

表3　坂東本『教行信証』朱声点の入声点

「急」(キフ)の入声点

声点＼下接字頭音	舌内 t内		唇内 p内		喉内 k内	
	清急 ○(●)	濁急 ー	清急 ○(●)	濁急 ー	清急 ○(●)	濁急 ー
無声	7(13)	5	2(7)	6	1(5)	1
有声	1(6)	2	0(1)	0	1(2)	0
語末	2(4)	2	0(0)	0	3(2)	0

「緩」(ユル)の入声点

声点＼下接字頭音	舌内 t内		唇内 p内		喉内 k内	
	清緩 ○○(●●)	濁緩 ○̣̄(●̄)	清緩 ○○(●●)	濁緩 ○̣̄(●̄)	清緩 ○○(●●)	濁緩 ○̣̄(●̄)
無声	1(1)	1(0)	4(3)	2(1)	12(7)	10(9)
有声	1(0)	2(0)	2(0)	2(1)	5(6)	5(5)
語末	0(1)	4(2)	6(4)	5(3)	17(5)	11(13)

右の通りであり、区別した「●」等は、声点の機能としては「○」等と同等である、と見られる。そこで、以下、朱声点では両者を区別せずに扱う。

この朱声点には、全体の加点数に比して、対応規則から外れる例が多い。次の例である。

○語末または有声音が続くにも拘わらず、急の入声点が加点された唇内・喉内入声字(九例)

〔逼〕逼(ヒチ)(入急)悩ス(三15.6)　〔接〕接(入急)誘(イウ)(平)(四23.5)　〔徳〕至(上)徳(入軽急)(二108.7)・至徳(入軽急)(二43.8)・徳(入軽急)號(カウ)(平濁)(二62.6)・徳(入軽急)号(平濁)(二14.5)　〔督〕督(トク)(入軽急)(二48.7)　〔略〕廣(平)略(リヤク)(入急)(二76.2)　〔弱〕怯弱(ニヤク)(入急)(二25.7)

○緩の入声点が加点された舌内入声字(十三例)

〔一〕一(入緩)百(入緩)俱(上)胝(上)界(平)(二102.3)　〔佛〕阿彌陀佛(入緩濁)(二43.3)・佛(入緩濁)名(去)(二97.7)　〔脱〕解脱(入緩濁)(二76.8)・解(平濁)脱(入緩濁)(二27.7)　〔實〕實(入緩濁)(二51.5)　〔逸〕放(ハウ)(平)逸(イチ)(入緩濁)(二61.5)　〔別〕別(入緩濁)ンテ(二100.4)・別(入緩濁)號(平濁)(二47.8)　〔劣〕劣(レチ)(入緩)夫(二116.8)　〔述〕宣(平)述(入緩濁)(二75.2)　〔伐〕伐(ハチ)(左)(入緩濁)(二129.4)　〔忽〕忽(入緩)(入軽急)然(上濁)(去)(二129.1)

5．坂東本『教行信証』墨声点小・朱声点と他の親鸞遺文声点との相違点

右のとおり、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点とは、親鸞自筆『觀經・阿弥陀經集註』経本文の声点に近い形式および機能を持つ。

しかし、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点は、『觀經・阿弥陀經集註』と次の諸点で異なる。

A．入声以外に、「○̣(●̣)」を濁声点として使用する点。

坂東本『教行信証』の墨声点・小と朱声点は、濁声点として「一」を使用しながら、入声字よりも平上去声字に多く、「○̣(●̣)」を濁声点として用いている。

しかし、『觀經・阿弥陀經集註』経本文の声点は、平上去声では、濁声点に「一」のみを用いる。

B．入声以外に、「○̣(●●)」を濁声点として使用する点。

『觀經・阿弥陀經集註』経本文の声点では、「●●」は、入声字に限定して使用されている。

しかし、坂東本『教行信証』では、「○̣」が入声以外に加点された例が小林論文ですでに指摘されている。墨声点・小の次例(四例)である。

鳩(上)槃茶(タ)(平濁)(六末20.1)・鳩槃茶(タ)(平濁)(六末26.4)・擅(タ)(上濁)菟(ト)(平濁)婆(六末24.2)・種智(平濁)(六末42.1)

右の外に、「○̣」を入声字以外に加点した例が、墨声点・小に十例存する。

應化(平濁)道(四22.6)・昂(ハウ)(上濁)(六末21.7)・軫(シム)(平濁)(六末22.9)・尾(ヒ)(平濁)(六末23.9)・牛(キウ)(平濁)女(チヨ)(六末24.1)・擅(タ)(上濁)菟(ト)(平)婆(六末24.5)・槃遮(シヤ)(上濁)羅國(六末26.3)・村(シユ)(平濁)落(六末26.9)・賢(平濁)首(平濁)(六末38.8)・事(平濁)(六末85.3)

朱声点にも、「●●」を入声字以外に加点した例が存する。

「我(平濁)」(二48.6)

これら十五例の「○̣(●●)」は、濁声点であろう。

ところが、他文献で親鸞は、「○(●●)」を濁声点として使用していなかった。

C．入声字以外に入声点を加点した例、入声字に入声以外の声点を加点した例が存する点。

これも、小林論文に部分的な挙例がある。坂東本『教行信証』全体では、次の用例数である。

入声字以外に入声点を加点した例

墨声点・小　七例、　朱声点　三例

入声字に入声以外の声点を加点した例

墨声点・小　二五例、　朱声点　八例

このような例は、坂東本『教行信証』墨声点大と『觀經・阿弥陀經集註』声点中には、皆無である。(14)

D．入声急・緩の対応規則に、比較的例外が多い点。

坂東本『教行信証』入声急・緩の対応規則例外のうち、「逼・一・日」は、『觀經・阿弥陀經集註』経本文声点でも、全体の傾向から外れる漢字であった。

しかし、『觀經・阿弥陀經集註』経本文には、「接・十」「足・色・錯・赤」に無声子音が続く場合以外の急声点加点例は無く、「佛・實・別・説・出・脱・逸・劣」に緩声点加点例は無い。(15)

これらの点から、坂東本『教行信証』墨声点・小と朱声点は、親鸞自筆加点であることに疑問が持たれる。(16)

五、結び

以上、本稿では、次のことを述べた。

浄土真宗の開祖親鸞(一一七三―一二六二)は、左の、三種類の声点形式を使い分けていた。

1．入声に急(舌内入声音と促音)・緩(喉内・唇内入声音)を区別する声点形式

清「●」・濁「一」とし、入声には「清急●」、「濁急一」、「清緩●●」、「濁緩●」を区別する。この声点形式は、漢文を音で通読する、いわゆる字音直読資料に用いられている。

2．入声に急・緩を区別しない声点形式A(清「○」・濁「○」)

清「○」・濁「○」のみを区別する。この形式の声点は、漢文または漢語中心の本文であり、漢文本文部分を訓読した文献に使用されている。

3．入声に急・緩を区別しない声点形式B(清「●」・濁「一」)

清「●」・濁「一」のみを区別する。この形式の声点は、漢字片仮名交じり文であるか、漢字片仮名交じり文を含む文献に使用されている。

また、漢文訓読資料である坂東本『教行信証』は、清「○」・濁「○」のみを区別し、入声に急・緩を区別しない形式の声点加点(右の2)が先ずなされ、その後、別形式の声点が重ねられている。(17)後に加点された小さな墨声点と朱声点は、他の親鸞遺文の声点に見られない加点実態を示す。したがって、親鸞一個人の訓点を問題とする場合は、正確を期すため、坂東本『教行信証』における小さな墨声点と朱声点とを対象外とするのが望ましい。

注

(1) 『御影堂平成大修復事業記念西本願寺展』(二〇〇三年、東京国立博物館)、『増補　親鸞聖人真蹟集成　第三巻』(二〇〇七年、法蔵館)等、参照。『觀經・阿弥陀經集註』の声点図は、本文中に述べるように、存覚によって、二度写されている。また、専修寺蔵『浄土高僧和讃』は、四日市市中山寺蔵『浄土高僧和讃』文明十五年(一四八三)真慧書写本の巻末に写されている。

(2) 西本願寺蔵寛喜二年(一二三〇)親鸞自筆書写『唯信抄』(巻頭)の声点図も、右とほぼ等しい。ただし、声点図・語例は墨で記され、朱声点が加点されている。そして、左上図では、喉内入声字「若」「各」を上字とし、「清緩」の声点が加点された「若人」「各與」を先に置いている。また、左下の図では、「眷属」を最初に挙げている。これは、「濁急」の例として掲出した「眷属倶」と対応させ、理解を促すためであろうと考えられる。これらの点から、『唯信抄』の声点図は、『觀經・阿弥陀經集註』の声点図と比較してより整備されていると言えよう。なお、専修寺蔵『浄土高僧和讃』の声点図は、語例が省略され、片仮名書きであるが、壺に書き込まれた声点は、全同である。

(3) このことは、『三帖和讃』について、名畑應順『親鸞和讃集』(一九七六年、岩波書店)「解説」に指摘されている。

(4) i『晨旦國十四代』は国名が列挙されるのみである。その他、親鸞の訓点を移点した、専修寺蔵真佛筆『彌陀経義集』、専修寺蔵顕智筆『彌陀経義集』(建長七年(一二五五)親鸞八十三歳本奥書・永仁元年(一二九三)書写奥書)、同『聞書』、同『見聞』、専修寺蔵真佛・顕智筆『西方指南抄』を、これらに加えることができる。

(5) ただし、本資料には、上声・去声に限り、濁「ー」が使用されている。細字の註文への加点のため、返点・句点と紛れない場合は、「ー」としたのではないかと思われる。

b～jの漢文訓読資料でも、清「●」・濁「ー」形式の声点を用いれば、加点は容易で、統一的である。しかし、漢文訓読資料では、「●」「ー」は返点・句点と紛れやすいため、避けられたものであろう。

なお、「○」一例のみであるため掲げなかったが、専修寺蔵『唯信鈔(平仮名本)』(第八巻)には、「○」の墨声点が加点されている(「宿(平)善」(67.3))。平仮名文に「○」を加点した貴重な例である。

(6) j『西方指南抄』における声点加点例は、大部分、漢文訓読部分に存する。全七七例の声点加点例のうち、六二例は清「○」・濁「○̄」の形式である。残る一五例が清音「●」濁音「ー」の声点である。

(7) このうち、1と3とが本文種の相違に基づいて使い分けられていることは、金信昌樹「親鸞の声点資料をめぐる諸問題」(「真宗総合研究所研究所紀要」第七号、一九八九年二月)、同「親鸞と声点―堺真宗寺本『本事讃』について」(「印度学仏教学研究」第四一巻第二号、一九九三年三月)、同「親鸞の声点資料の研究―『唯信抄』信証本と顕智書写本の比較」(「龍谷大学大学院文学研究科紀要」二七、二〇〇五年十二月)で、部分的に指摘されている。

なお、『増補　親鸞聖人真蹟集成』所収本中、声点が加点されていない文献は、以下のものである。

○平易を旨とした漢字片仮名交じり文

一念多念文意(第四巻)、唯信鈔文意(正月十一日本)(第八巻)、唯信鈔文意(正月二十七日本)(第十巻)

○短文の漢文

諸名号・讃銘(第九巻)、浄土五會念佛略法事儀賛(見聞集Ⅰ)(第九巻)、数名目(第九巻)、須彌四域經文(第九巻)、三骨一廟文(第九巻)、曇摩伽菩薩文(第九巻)、聖覚法印表白文(見聞集Ⅱ)(第九巻)、御念仏之間用意聖覚返事(見聞集Ⅱ)(第九巻)、四十八願文断簡(第九巻)、道綽略傳(第十巻)、大集経・涅槃経文(第十巻)、浄土本縁経文(第十巻)

○短文の漢字片仮名交じり文

浄肉文・十惡(第九巻)、或人夢(見聞集Ⅱ)(第九巻)、法然上人御消息・九条殿北政所あて(第十巻)

○短文の平仮名文

平仮名書簡(第四巻)

(8) また、ここから、入声に急・緩を区別する発音も、親鸞において、特別なものであったと考えられる。佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(二〇〇九年、汲古書院)第三部第五章、参照。

(9) これ以外に、入声点のうち、●が朱、○が墨筆小で、全体として緩声点となっている例が一例存する(「徳(入緩)」(二162.6))。同様な理由で、これも除外する。

(10) 坂東本『教行信証』における本文批判研究および本文筆跡研究の進展により、現存坂東本『教行信証』の全体は、親鸞書写の前期・中期・後期書写部分と、他者書写にかかる異筆部分とに分けられることが明らかにされた(重見一行『教行信証の研究』(一九八一年、法蔵館)、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(一九九七年、法蔵館))。これらの研究に依ると、『親鸞聖人真蹟集成』全六四七頁中、前期書写部分―約四三六頁、中期書写部分―約四七頁、後期書写部分―一五六頁、異筆書写部分―約八頁分である(中期書写部分を1とすると、前期書写部分:中期書写部分:後期書写部分:筆書写部分は、約9.28対1対3.25対0.17となる)。

朱声点は、巻二43頁～巻三62頁までの150頁中、本文前期筆蹟部分に、全体の約99%が集中する。その他は、墨声点に重ねて加点した例、同一字に墨声点と異なる声調を示した例などである。

(11) 句末か句末以外かを、親鸞加点の句切り点に依って判定し、延べ数を記した表である。句末以外の例は、後続字の頭音によって分けた。後続字頭音は、当該字の呉音のそれを採り、本資料当該例の声点によって清濁を判定した。当該例に声点が存しない場合は、本資料中の当該字声点加点例に依拠した。なお、喉内入声音の促音化は、カ行音が続く場合に集中する。この点、同時代の他文献と同様である。佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』の漢字音について」(「比治山大学現代文化学部紀要」創刊号、一九九五年三月)では、それを区別して整理した。本稿では、この点は指摘済みのこととして、簡略な表にまとめた。

(12) 語の認定は加点された訓点に依り、漢語サ変動詞は一語とした。なお、『廣韻』不掲載字は、対象外とした。

(13) 奪(タチ)(入緩)命(六末15.2)・世饒(去)王(上)佛(入緩)(三173.7)は、濁声点の可能性があるため、対象外とした。

(14) 他の親鸞遺文でも、次の二例がその全例である。

无(ム)(上)極(コク)(平濁)尊(ソン)(上)(専修寺蔵『三帖和讃』浄土五四4)

寺(シ)(上濁)塔(タウ)(平)(本誓寺蔵『皇太子聖徳奉讃』一三3)

(15) 「濕・翼・徳・督・略・弱・闊・活・述・決・殺・伐・忽」の諸字には、『觀經・阿弥陀經集註』経本文での声点加点例が無い。

(16) 坂東本『教行信証』の「返点送仮名等」に、親鸞自筆以外の加筆が

存することは、次の諸文献で認められている。

侍董寮編『真実教行証文類』（一九二六年、大谷派本願寺）凡例、

住田智見「教行信証」（『国訳一切経』諸宗部二十二（一九三七年、大東出版社））、親鸞聖人全集刊行会編『定本親鸞聖人全集　第一巻』（一九六九年、法蔵館）凡例。

声点にも、親鸞以外の筆が加えられている可能性が高い。

(17) ①墨声点大は、坂東本『教行信証』全体を通して、加点されている。よって、本文書写の時々に、書き込んだことになる。

②墨声点小および③朱声点は、前期筆跡部分に加点が集中する（注(10)参照）。

重見一行『教行信証の研究』(330 331頁)は、「特に行巻から信巻前半における多数の朱による補訂」の加点時期を、後期筆跡書改部分に全く見えないことから八五歳以前、専修寺本が補訂後の訓点左注を相当よく伝えていることから八三歳以前加点とした。そして、文明本『教行信証』に朱点が移点されていないことから、その祖本が書写された寛元五年親鸞七五歳の時には、未だ朱筆が加点されていなかった、とした。すなわち、③朱声点は、親鸞七六歳～八三歳の間に加点されたことになる。多くの②墨声点小は、その前の加点である。ただし、『親鸞聖人真蹟集成』第一巻・第二巻（一九七三・一九七四年、法蔵館）凡例に、「原本の右訓、左訓、返り点、四声点等は、(1)墨、(2)墨の上に朱、(3)朱、(4)朱の上に墨、(5)墨の上に墨書しさらに加朱、に大別できる」と指摘されるとおり、③朱声点の後に加点された②墨声点小も存する。

原本の閲覧が許されたならば、②③声点の関係について精査したい。

[付]　坂東本『教行信証』墨声点・大　全一二七七例

墨声点・大と認定した声点を、出現順に掲げる。ただし、同一のものは初出例に所在のみ記す。加点字が数字連続する場合は、続けて掲げた。墨声点・大以外の訓点は、省略した。

特(入軽濁)(一11.6)　遏(入)(一11.7)　嗟(上)(一15.7)　咨(上)嗟(上)(一16.3)　等(平)倫(平)(一18.6)　蜎(平)(一20.1)　飛(平)蠕(去)(一20.1)　嘆(去)(一20.6)　蠕(去)動(平濁)(一20.7)　心(去)(一21.5 23.4 40.1 42.4 54.1 55.4 58.3 59.2 62.6 63.1 65.2 65.6 71.8 104.5 114.3 136.7)　三 5.4 6.1 6.4 7.5 7.5 8.2 14.2 14.6 18.4 25.4 25.7 31.8 33.3 33.6 41.2 41.3 41.4 41.4 41.5 41.5 41.6 41.7 41.7 41.8 42.1 43.1 44.4 46.2 47.5 49.8 50.1 55.3 56.3 57.2 59.8 60.5 60.5 63.8 66.2 66.5 71.7 72.7 82.2 82.2 82.3 82.8 83.1 83.3 83.3 83.4 84.1 84.1 88.3 106.3 106.5 107.2 110.7 121.3 123.8 129.3 129.5 129.6 129.7 129.8 131.3 131.4 133.5 133.5 133.6 137.4 137.5 137.7 143.4 149.8 150.2 150.7 152.1 165.4 165.4 166.6 167.6 167.8 170.2 170.4 170.5 173.8 176.3　四 14.4 39.7 40.2 43.5 43.5 43.7 43.8 48.3 48.6 49.4　五 7.5 14.5 14.6 23.2 47.2 56.2 66.4 68.3 68.5　六本 4.7 5.5 21.7 22.8 24.1 28.7 29.1 29.6 34.3 38.1 50.7 50.8 53.2 53.3 54.6 67.7 78.7 79.3 80.2 80.4　六末 55.3 59.1 60.1 60.4 84.5 85.1 85.2 85.2 85.3 87.6 97.1)　宿(平)(二25.2)　三 130.3　五 11.3　六本 55.8　六末 4.7 5.2 20.4 44.4 58.5)　乾(去濁)闥(入濁)婆(上濁)(一32.1)　軍(去濁)衆(平)(二35.4)　行(去濁)(二36.2)　豪(去)(二38.4)　事(平濁)(二39.5 47.1 51.6 73.1 16.7 27.3 150.4 165.5)　五 45.8　六本 13.2　六末 5.6)　穏(平)(二40.4)　慈(上濁)(二40.4)　難(去)(二40.5)　邊(去)際(平濁)(二41.8)　稱(去)(二43.3)　三 83.8　四 46.4　五 7.7 14.4)　相(平)(二46.6 65.2)　三 170.2)　致(上)(二47.7)　航(平軽)(二47.7)　婆(上濁)鼓(上)槃(上)頭(上濁)(二48.3)　膺(平)

(二48.3) 龜(平)(二51.6) 毛(去)(二51.6) 樂(平濁)(二55.2) 方(去)(二57.6) 翳(去)
身(上)(二61.1) 寶(平)(二62.7) 困(去)(二64.1) 貌(去)(二65.2) 龕(上)(二65.6) 識
(入)(二65.6) 外(平濁)(二68.1) 不(上)捨(平)(二69.3) 即(入)言(上濁)(二75.7) 至(上)理
(平)(二77.1) 應(平)生(去)(二77.2) 見(平)(二79.1 三165.4 五23.3 42.1 42.1 42.1 42.7) 津(平)樑
(平)(二79.8) 牽(去)(二86.4) 總(平)官(平輕)(二87.5) 張(平)掄(平)(二87.5 88.5) 捷(入)
徑(平)(二87.7) 清(去)晨(平)俛(去)仰(平)(二87.7) 不(上)壞(平)(二87.8) 微(上)(二87.8
三33.3) 夢(平)幻(平濁)(二88.2) 眞(去)(二88.2 六本3.7) 壽(平濁)夭(上)(二88.2) 復
(入)(二88.4) 後(去)悔(平)(二88.5) 終(去濁)歸(上)(二94.1) 攬(去)(二94.8) 猖(上)狂
(平)(二95.5) 宗(去)元(平濁)嘉(平)(二97.3) 用(平)欽(上)(二98.1) 飛(上)錫(入)(二99.8)
首(上)(二100.1) 有(平)(二104.7 三116.4 141.5 141.6 141.8 142.1 142.7 五23.4 26.3 26.4 26.5 30.5 30.6 37.8 54.7)
轉(平)(二108.7 六本53.7) 鼓(上)(二110.4) 鎧(去濁)(二115.5 129.2) 局(入)(二117.3) 衷(平)
(二125.6) 丹(去)(二125.7) 勇(上)將(上)幢(上濁)(二129.2) 魔(上)軍(上)(二129.2) 縛(入濁
)(二129.5) 訓(平)(二130.7) 夏(平)(二138.1) 日(入輕濁)域(入)(二138.1) 天(平)子(平)(二
139.7) 開(去)闡(平)眞(去)心(上濁)(三3.3) 矜(平)哀(去)(三3.3) 貶(平輕)(三3.5) 光
(去)澤(入輕)(三4.1) 華(上)(三4.2 六末96.1) 人(平輕濁)倫(平)(三4.3) 邦(去)(三4.3)
徒(平)衆(平)(三4.3) 按(平)(三5.2) 長(平)生(平)不(上)死(上)(三5.3) 神(平)方(去
)(三5.3 100.4) 妙(平)術(入濁)(三5.4) 心(上濁)(三5.6 六本51.8) 希(上)有(平)(三6.1)
最(去)勝(平)(三6.1) 捷(入輕)徑(平)(三6.2) 顛(去)(三7.5) 虛(上)僞(上濁)(三7.5)
重(平濁)愛(平)(三7.7) 所(平)有(平)(三8.6) 諸(上)智(平)(三11.4) 至(平)(三14.6)
抱(平)(三22.1) 情(上濁)(三26.8) 明(去)(三27.1 六末81.3) 回(上)(三33.7) 道(平
濁)(三35.2) 壞(平)(三38.1 38.3) 心(上)(三41.8) 生(去)(三44.1 54.4 54.5 135.4) 欲(入)覺(入
)(三44.1) 聞(去)(三54.3 五42.1 42.6) 思(上)(三54.4) 獲(入濁)(三67.6) 開(去)(三
77.5 六本104.6) 發(入輕)(三77.5) 淳(去濁)心(上)(三81.5) 質(入)多(上)(三83.8) 慮(上)
知(上)(三84.1) 能(去)(三88.2 六本17.1 四12.4) 衆(平)生(平)(三90.1) 者(平)(三91.5)
聽(平)者(平濁)(三91.5) 王(平)日(入濁)休(平)(三99.6) 徑(平)(三100.3) 普(平)授(平濁)
(三101.3) 舉(上)(三102.6) 杜(上)(三102.7) 玉(入濁)(三103.1) 業(入輕)儒(平濁)(三103.2)
才(平)(三103.2) 劉(平)雷(平)柳(平)子(上)厚(平)白(入)樂(入輕)(三103.2) 清(去)閑(上濁)
(三104.4) 大(去)醫(上)(三108.8) 罪(去濁)(三111.4) 通(去)(三113.6) 放(平)捨(平)(三
115.4) 畜(平)生(去)(三116.5 121.8) 婆(上濁)蘇(上)(三117.5) 有(平)我(平濁)(三118.3 118.4) 无
(上)我(平濁)(三118.3) 不(上)破(平)不(上)壞(平)不(上)繫(平)不(上)縛(入濁)不(上)瞋(上)不(上)
喜(平)(三118.5) 无(上)我(平)(三118.6) 壞(平)滅(入輕)(三118.7) 殺(入)者(平)死(平)者(平)
(三118.8) 不(上)(三127.8) 星(上)(三130.3) 口(平)(三133.5 133.5 133.6 133.7) 輕(去)(三133.5 133.6)

身(去)(三133.5 133.6) 重(平濁)(三133.5) 勅(入輕)殺(入輕)(三133.7) 侍(上)臣(平)(三133.7)
先(去)王(平)(三134.2 136.2 136.5) 生(去)(三135.4) 非(上)有(平)(三141.5 141.6 141.7 141.8 142.3 142.6)
非(上)無(上)(三141.5) 非(上)无(上)(三141.6 141.7 142.4 142.6) 非(上)无(上)有(平)(三142.1) 後
(去)宮(平輕)采(平)女(平)(三144.8) 已(上)(三149.2) 己(平)身(去)(三152.1) 汚(平)坌(平)(三
153.8) 外(去濁)人(平濁)(三154.7) 婆(去)羅(上)畹(上)枝(平)(三155.8) 庶(上)(三160.7) 計
(平)(三165.5) 仁(平濁)義(上濁)禮(上)智(上)信(去)(三165.8) 安(平)慰(平)(三168.1) 刹(入)那
(上)(三169.8) 所(平)觀(平)(三170.2) 蛄(上)(三170.7) 直(入輕濁)(三171.8) 淄(上)州(平)
(三174.2) 執(入)(三174.6 六本50.6) 來(去)生(上)(四6.5) 當(去)(四8.2) 長(上)(四
12.5) 高(平)(四23.2) 循(去)(四23.3) 身(去)(四26.7) 會(平)(四29.7) 是(平濁)(四
34.1) 非(上)(四34.1) 清(去)静(平濁)(四38.1) 直(入濁)(四43.5) 應(平)(四46.5 六末
70.6) 緣(上)(四46.7 46.7 49.5) 動(平濁)(四46.7) 静(平濁)(四46.8) 言(上濁)(四49.5)
好(平)(四49.5) 勝(平)言(上濁)(四49.6) 眞(去)言(上濁)(四49.6) 嘆(去)(五7.8) 暎(去
)(五9.4) 瑕(平)穢(平)(五12.3) 雄(去)傑(入)(五12.5) 蜎(平)飛(平)蠕(去)(五13.1)
婬(去)泆(入)瞋(去)怒(上)(五13.3) 獪(平)狩(上濁)(小声点黄色) 辟(入)荔(平)考(平)掠(平)(五13.4)
譽(平)(五14.5) 闡(平)(五28.6) 親(去)(五28.7) 无(上)(五30.1 30.2 30.2) 處(平)(五
30.6 六本7.5) 廣(平)(五38.6) 不(上)(五39.7) 世(平)(五39.7) 動(平濁)(五39.8)

覺(入)者(平)(五41.7) 眼(平濁)見(平)(五42.1 42.5 42.6) 聞(平濁)見(平)(五42.7 42.8) 色(入)
貌(去)(五43.7) 積(入)習(入)(五46.1) 積(入)(五46.2) 奇(上)(五49.2) 神(平)(五51.1)
作(平)(五51.5) 世(平)(五54.2) 明(去)朗(上)色(入)超(去)(五55.4) 施(平)(五55.6)
闇(平)(五55.8) 赫(入)(五56.6) 業(入濁)足(入)(五57.5) 作(平)(五65.6 65.7 65.7 65.8) 薫
(去)(五68.5) 僞(上濁)(六本3.8) 虚(上)(六本3.8) 樹(平濁)(六本6.4) 精(平)舍(上
濁)宮(去)(六本6.8) 樓(去)觀(平)(六本6.8) 覆(平)蓋(去)(六本7.2) 等(平)(六本
7.4) 金(去)鎖(上)(六本9.3) 疑(上濁)(六本9.8) 蜜(入)(六本17.4) 觀(平)門(去)
(六本20.6) 誦(平濁)(六本27.6) 用(平)功(去)(六本38.8) 僞(上濁)(六本39.1) 便(去
濁)(六本40.7) 即(入)(六本40.8) 執(入)(六本50.6) 言(上濁)(六本50.6 50.7 50.8 50.8)
一(入)(六本50.8) 依(上)(六本51.3) 専(去)(六本53.2) 成(去濁)滿(上)衆(上)禍(平)(六
本53.7) 襄(平)陽(平)(六本67.3) 性(平)(六本70.3) 有(平)(六本71.5) 人(去)我(平
濁)(六本78.8) 減(上濁)(六本86.8) 滅(入)(六本86.8) 當(平)(六本87.2) 今(去)(六
本87.2) 周(平輕)第(平濁)(六本88.1) 主(上)穆(入濁)(六本88.1) 玄(平)籍(入輕)(六本
89.3) 嘉(上)猶(去)(六本89.3) 率(入)(六本89.4) 科(上)(六本89.4) 運(去)(六本
89.6) 衰(平)(六本89.7) 後(去)(六本89.7) 周(平輕)異(平)(六本94.2) 費(平)長(平)
(六本94.5) 周(平輕)(六本94.5 六末66.1 74.4) 怪(平)異(上)(六本96.4) 聖(平)(六本

99.5）破(平)（六本104.3）用(平)（六本105.6）大(去)雪(入輕)（六末4.6）星(上)（六末4.7）所(平)行(去濁)（六末5.6）法(入)用(平)（六末6.6）荼(上濁)（六末7.5）坻(平)（六末8.8）王(去)宮(上濁)（六末10.6）塚(平)（六末27.1）陂(上)泊(入)（六末27.2）受(平濁)（六末33.2）舅(平)（六末56.6）蛇(上濁)（六末57.5）適(入)（六末59.6）觀(去)（六末60.1）箴(平)（六末60.5）玄(平)妙(去濁)玉(入輕濁)女(上濁)（六末60.7）常(平)（六末61.2 63.4 69.7 69.7 74.5）牧(入輕濁)（六末61.2）聖(去)母(上濁)（六末61.3）景(上)裕(平)戴(去)詵(平)韋(平)玄(平)（六末61.4）文(平濁)（六末61.5 62.8 79.4）文(平濁)周(平輕)孔(上)（六末74.4）梁(平)（六末61.5）元(平濁)帝(去)（六末61.5）周(平輕)弘(平)政(去)（六末61.5）太(去)上(去)（六末61.6 61.7 62.2 81.6）皇(平)（六末61.6）堯(平濁)舜(去)（六末61.6）上(去)古(上)（六末61.6）大(去)德(入輕)（六末61.7）君(平輕)（六末61.7 61.8）萬(去濁)（六末61.7 72.6）郭(入)莊(平)（六末61.8）典(上)（六末62.2 66.1）道(去)家(上)（六末62.2）玄(平)妙(去濁)（六末62.3）中(平)胎(去)朱(平)韜(平)（六末62.3）塞(去)（六末62.3）李(上)（六末62.4）玄(平)妙(去濁)（六末62.4）正(去)（六末62.5）謬(去濁)談(平)（六末62.5）妻(平)（六末62.6）夫(平輕)（六末62.6）形(平)（六末62.6 67.2 68.1 68.2 68.3）產(上)（六末62.7）周(平輕)書(上)（六末62.8）虛(平)（六末62.8）實(入)（六末62.8）信(去)（六末62.8）矯(平)盲(平濁)（六末62.8）禮(上)（六末63.1）左(上)遷(平)（六末63.1）左(去)（六末63.2）上(去)（六末63.3）文(平濁)王(平)（六末63.7）隆(平)周(平輕)（六末63.7）宗(平)（六末63.7）莊(平)王(平)（六末63.8）廚(去)（六末63.8）吏(平)（六末64.2）隆(平)周(平輕)（六末64.3）昭(平)王(平)（六末64.4）盛(去)年(平)（六末64.5）降(去)（六末64.7）莊(平)王(平)（六末65.1）桓(平)王(平)丁(平輕)卯(上濁)（六末65.4）景(上)王(平)（六末65.4）姬(平)昌(平)（六末65.5）誕(平)昭(平)王(平)（六末65.6）穆(入輕濁)王(平)（六末65.6）老(上)（六末65.8）文(平濁)史(上)（六末66.2）老(上)君(平輕)（六末66.4）群(平)胡(平)（六末66.7）賴(去)鄉(平)（六末67.1）秦(平)佚(入輕)（六末67.1）弔(去)（六末67.2）遁(去)天(平輕)（六末67.2 68.1）漢(去)明(平)（六末67.3）蘭(平)臺(平)（六末67.4）書(平)（六末67.4）秦(平)佚(入輕)（六末67.5 67.7）夫(平輕)（六末67.6）哭(入輕)（六末67.7）道(去)（六末68.1 73.4 73.4 73.8 77.3）免(上濁)縛(入濁)（六末68.2 68.3）袵(上濁)（六末68.8）戎(平濁)狄(入輕)（六末68.8）右(上)命(去)（六末68.8）冢(上)鄉(平)（六末69.1）介(去)鄉(平)（六末69.1）史(去)記(平)（六末69.2）藺(去)相(平)如(平濁)功(平輕)（六末69.2）龐(平)頗(平)（六末69.3）張(平)儀(平濁)相(去)（六末69.3）犀(去)首(上)（六末69.4）皇(平)哺(去)（六末69.6）高(平輕)士(平)（六末69.6）楚(上)（六末69.6）相(去)人(平濁)（六末69.6）李(上)耳(上濁)（六末69.7 69.8）嵇(平)康(平)（六末69.8）涓(平)（六末69.8）疾(入)（六末69.8）衆(平輕)畫(平)（六末70.1）信(去)（六

末70.2）先(平)五(上濁)気(去)三(平輕)光(平)（六末70.3）用(去)張(平)陵(平)左(上)道(平)信(去)（六末70.5）天(平輕)常(平)（六末70.5）召(去)（六末70.6）介(去)（六末70.7）卓(入)(小声点追加)爾(上濁)（六末70.8）孝(去)（六末71.1）忠(平輕)（六末71.1）聲(平輕)教(去)（六末71.2）百(入)王(平)（六末71.2）玄(平)風(平輕)（六末71.2）古(上)（六末71.3）常(平)然(平濁)（六末71.3）楷(上)（六末71.4）義(去濁)（六末71.4）仁(平濁)（六末71.4）孝(去)（六末71.4）善(去)（六末71.7）道(去)德(入輕)（六末71.8）禮(上)（六末71.8）忠(平輕)信(去)（六末71.8）璵(去)仁(平濁)（六末72.1）匹(入)婦(去)大(去)孝(去)（六末72.1）中(平)夏(平)（六末72.2）華(平)俗(入)（六末72.2）原(平濁)（六末72.3）子(上)桑(平)（六末72.3）子(上)貢(平)（六末72.3）孝(去)（六末72.4）人(平濁)父(上)（六末72.4）天(平輕)下(上)（六末72.4）忠(平輕)敬(上)（六末72.5）人(平濁)君(平輕)（六末72.5）化(去)（六末72.5）明(平)辟(入)(小声点追加)（六末72.6）仁(平濁)（六末72.6）聖(去)王(平)（六末72.6）臣(平)孝(去)（六末72.7）榮(平)（六末73.3）清(平)虛(上)（六末73.5）勢(去)競(去)（六末73.6）文(平濁)史(去)（六末73.6）齊(平)桓(去)楚(上)穆(入輕濁)（六末73.7）聖(去)（六末73.7 74.5 76.4 76.8 84.7）二(去濁)（六末73.8）化(去)（六末73.8 75.6）淳(平)風(平輕)（六末74.1）三(平輕)聖(去)（六末74.1）澆(平)（六末74.3）玄(平)虛(平輕)沖(去)一(入輕)（六末74.3）詩(平輕)書(平輕)禮(上)樂(入濁)（六末74.3）教(去)（六末74.4）階(平)梯(平)三(平輕)畏(平)（六末74.5）由(平)漸(去)（六末74.5）談(上)（六末74.6）方(平輕)（六末74.7）遠(上)（六末74.7）苑(平)馬(上濁)（六末74.8）殷(平輕)周(平)（六末75.1）炎(平)威(平)（六末75.1）雷(平)（六末75.2）王(平)（六末75.3）雲(平)霓(平)變(去)（六末75.4）后(去)（六末75.4）周(平輕)書(平輕)（六末75.4）漲(平)穆(入濁)王(平)（六末75.5）暴(去濁)風(平)（六末75.5）齊(平)梁(平)王(平)公(平)守(去)牧(入濁)清(平)信(去)（六末76.3）滬(去)瀆(入)清(平)臺(平)（六末76.6）南(去)平(平)（六末76.7）文(平濁)宣(平)（六末76.7）蕭(平)后(去)（六末76.8）宗(去)皇(平)（六末76.8）模(平濁)（六末77.1）無(平濁)目(入濁)（六末77.2）有(上)靈(平)（六末77.2）通(平)（六末77.3）智(上)（六末77.4）稱(平輕)（六末77.4）然(平濁)（六末77.5）信(去)（六末77.5 85.4）郭(入)(小声点追加)（六末78.3）患(平濁)（六末78.4 79.2）夫(上)子(上)（六末78.4）子(上)淤(平)（六末78.5）神(平)解(去)（六末78.5 79.1）孔(上)丘(平輕)（六末78.6）蕭(平)然(平濁)（六末79.1）累(去)（六末79.1）夫(上)子(上)（六末79.2）劉(平)向(去)古(去)舊(平)（六末79.3）流(上)（六末79.3）老(上)（六末79.5）君(平輕)子(平)（六末80.6）大(去)霄(平)隱(平)書(平)元(平濁)上(去)眞(去)書(上)（六末80.6）元(平)上(去)大(去)道(去)君(平輕)（六末80.7）大(去)羅(平)（六末80.7）玉(入輕濁)(小声点追加)京(平)（六末80.8）金(平輕)床(平)（六末80.8）侍(去)（六末81.1）神(平)仙(平)（六末81.1）大(去)道(去)（六末

81.2）大(去)玄(平)都(平)（六末81.2）光(平)（六末81.2）金(平輕)眞(去)（六末81.3）郡(去)（六末81.3）縣(去)元(平濁)（六末81.3）鄉(平輕)定(去)志(上)（六末81.3）大(去)羅(平輕)（六末81.4）上(去)天(平)（六末81.5）大(去)道(去)道(去)（六末81.6）道(平)神(去)明(平)君(平輕)（六末81.7）静(去)（六末81.7）太(去)玄(平)（六末81.7）樓(平)都(平)（六末81.8）朝(平)晏(去)（六末81.8）玉(入輕濁)京(平)（六末82.1）道(去)君(平輕)（六末82.1）宋(去)人(平濁)陸(入輕)脩(平)静(去)（六末82.2）書(上濁)文(平濁)藝(去)文(平濁)志(平)（六末82.5）陶(平)朱(平)（六末82.6）范(去)蠡(上)（六末82.6）越(入)王(平)勾(平)踐(去)君(平輕)臣(平)（六末82.7）吳(平濁)（六末82.7）屎(去)（六末82.7）范(去)蠡(上)（六末82.8）變(去)化(去)（六末83.1 83.1）老(平)子(平)（六末83.2）幽(平輕)王(平)（六末83.2 83.3 83.4 83.5）后(去)（六末83.3）柱(去)史(上)（六末83.3）臣(平)（六末83.4）犬(上)戎(平濁)（六末83.5）君(平輕)父(上)（六末83.6）陸(入輕)（小声点追加）脩(平)静(去)（六末83.7）静(去)（六末83.8）玄(平)都(平)録(入輕)（小声点追加）（六末83.8）僞(平濁)（六末84.1 84.1）公(平)鄉(平輕)（六末84.4 84.7）周(平輕)公(平)（六末84.5）邪(上濁)（六末84.6）百(入輕)（六末84.8）侯(平輕)王(平)宗(平)室(入輕)（六末84.8）清(平)信(去)（六末85.3）清(平)（六末85.4）表(上)裏(上)（六末85.4）垢(平)穢(平)（六末85.4）災(平輕)鄣(平)（六末86.4）子(平)（六末88.8）悵(平)鬼(上)（六末90.2）時(上濁)媚(平)（六末90.2）魔(上)羅(上)（六末90.3）信(平)（六末90.3）釋(入輕)門(去)（六末91.4）洛(入)都(上)儒(平濁)林(平)（六末91.5）辯(去)（六末91.5）聖(去)曆(入)（小声点追加）（六末92.1）主(上)上(去)臣(平)下(上)（六末92.2）法(入輕)違(上)義(上濁)（六末92.2）大(去)祖(上)（六末92.3）禿(入輕)（六末92.6）聖(去)代(平)建(去)曆(入)（六末92.8）建(去)（六末93.5）曆(入)（小声点追加）（六末93.5）教(上)命(去)（六末95.3）簡(上)要(平)（六末95.4）徵(上)（六末96.5）念(平)（六末97.2）至(上)孝(平)（六末97.3）詮(上)（六末98.1）人(平濁)倫(平)（六末98.2）

（右以外の墨声点を墨声点小と判断した。なお、『親鸞聖人真蹟集成』の朱声点は、その凡例に記されるとおり、復元されたものであり、原本と異なる場合がある。）

［付記］本稿は、平成二十三年十月十六日に、東京大学山上会館にて開催された、第一〇五回 訓点語学会研究発表会における発表を基に成したものである。
ご指導下さった皆様に、御礼申しあげます。

［ささき　いさむ、広島大学大学院教授］

（平成二十三年十月三十日受理）